

育苗管理、除草剤散布と病害虫防除のポイント

近年、育苗期間中の気温が高く、苗立枯病や徒長苗の発生が多く見られます。また、天候不順による病害虫の発生も懸念されます。次のポイントに留意し、健苗育成と適正な防除に努めましょう。

1 育苗管理

(1) 育苗箱・培土の消毒

苗立枯病対策として育苗箱の消毒を行うとともに、購入した培土の消毒も行いましょう。

(2) 種子更新と比重選

種子は自家採種せず、毎年更新しましょう。比重選は、未熟粒を取り除き発芽率を高めるとともに、いもち病やもみ枯細菌病の罹病種子の除去を行います(表1)。

(3) 種子消毒

薬剤はいもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病に適用のあるものを選び、浸漬中にかく拌して消毒液が全体に行き渡るようにします。

(4) 浸種・催芽

ハトムネ状態になるまで浸種し(目安…日平均水温の積算で約100℃)、芽の伸びすぎに注意します。

表1 比重液の作り方

種類	溶液の比重	硫安の量 (水10L当たり)
うるち	1.13	2.9kg
もち	1.08	1.9kg

(5) 播種・出芽

播種は厚播きを避け(表2)、軟弱徒長や苗立枯病の予防に努めましょう。出芽は高温障害(高温によるヤケ)やもみ枯細菌病対策として、28℃を超えないように注意してください。

(6) 出芽後の水管理

出芽直後は湿害による生育不良を防ぐため、ジョウロなどで上からかん水します。緑化したらプールに2cm程度水を張り、表面が乾いたら入水を行います。水温の上がりすぎに注意し、時々水の入れ替えをして、徒長や根腐れしないように注意します。

(7) 苗の追肥

2〜3葉期頃に肥切れが見られたら、1箱あたり水500mlに対し硫安3〜5gを溶いて追肥します。葉に硫安水が残る場合は、上から水をかけてください。

表2 播種量と育苗期間の目安

苗の種類	播種量	育苗期間
稚苗	160~180g	20~22日
中苗	80~100g	25~30日

2 水稲除草剤散布時の注意点

抵抗性雑草発生防止のため、同一薬剤の連用は避け、成分の違う薬剤をローテーションしましょう。ほ場整備をていねいに行い、漏水を防ぎます。農薬散布時は水口と水尻をしっかりと止め、湛水状態を保ち、農薬散布後の7日間は掛け流しや落水をしないでください。高温時の散布は薬害を助長するところがあるので注意してください。薬害発生時は、数日間水を切って根の発根を促すようにします。

「田植え同時処理」で除草剤を散布する場合は、散布機から出る薬量の調製をしっかりと行い、植え付け幅を超えて薬剤が飛散しないようにします。また、代かきと田植えの間隔が長くなると土が固くなり、植え穴の戻りが悪くなることで薬害の発生につながるため注意が必要です。

3 病虫害防除

(1) いもち病

葉いもち（写真1）は低温（25℃前後）で湿度が高く、夜露が切れにくい条件が続くと発生しやすく、穂いもち（写真2）は病斑が止め葉に多く形成されたり、出穂後に低温と降雨が連続すると発

生しやすくなります。

種子消毒、箱施用剤、本田発生初期や出穂期前後の薬剤散布で防除します。窒素過多は発生を助長するため、適切な肥培管理を行いましょう。



写真1 葉いもち



写真2 穂いもち

(2) ばか苗病（写真3）

糸状菌（カビ）による病害で主に種子伝染します。育苗中は茎葉が黄化し、細く長く伸びて徒長します。本田でも黄化して徒長しますが、やがて枯死します。被害苗を確認したら抜き取ってください。本田で発生が見られたら株ごと抜き取り、土中に埋没させてください。



写真3 ばか苗病
(本田での症状)

(3) 紋枯病 (写真4)

夏期の高温多湿で多発します。被害が増加すると越冬菌核の増加にもつながります。令和4年産は紋枯病の発生による倒伏や坪枯れが見られました。適正な肥培管理で過繁茂を防ぎ、箱施用剤や本田での防除を行ってください。



写真4 紋枯病

(西部農業事務所普及指導課
農畜産指導係 北爪 雅恵)